

2ch逆RIAA回路ボード

【RIAA-1】

本機はRIAA規格フォノイコライザーアンプの測定、試聴に使用する逆特性の回路です。

〈RIAA特性の測定法〉

発振器を入力（INPUT）につなぎ込み、本ボードの出力をテストするイコライザーアンプに入力します。イコライザーアンプの出力を電子電圧計に入れ、周波数特性を読めば、これがイコライザー偏差（RIAA偏差）になります。

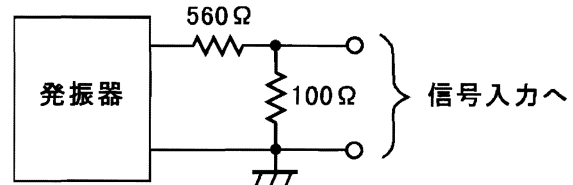
発振器出力を1V程度とし、減衰度切換スイッチを40dBとすると1kHzの出力が10mVとなり、MM型カートリッジに近似します。60dBではMC型に近似します。

周波数範囲は20~20kHzの範囲で測定します。（発振器とミリバルの周波数特性は前もって確認しておくようにします）。

〈より精密な測定には〉

発振器の出力抵抗（ R_g ：通常は600Ω）が大きいと、本回路自体が容量性入力のため、高域側でのマイナス誤差が大きくなります。（ $R_g=600\Omega$ で0.3dB弱）

より高精度な測定が必要な時は、図のような抵抗減衰器を付けて信号を送り出します。出力は1/12程になりますが、出力抵抗は100Ω以下になり、高域での誤差はずっと小さくなります。



〈ノイズテスト時の注意〉

イコライザーアンプのS/N測定の際は本機の減衰度切換スイッチを「OFF」ポジションにセットします。S/N比のよいMCヘッドアンプでは信号源抵抗でノイズレベルが大幅に変わりますので、このポジションのように $R_g=2.2\Omega$ 程度に設定します。

〈原音比較法によるイコライザーアンプの聴感テスト〉

◆ 発振器の代わりにCDの良質な音楽ソースを用意します。

CDプレーヤーから直に再生した音を原音（元の音）とします。

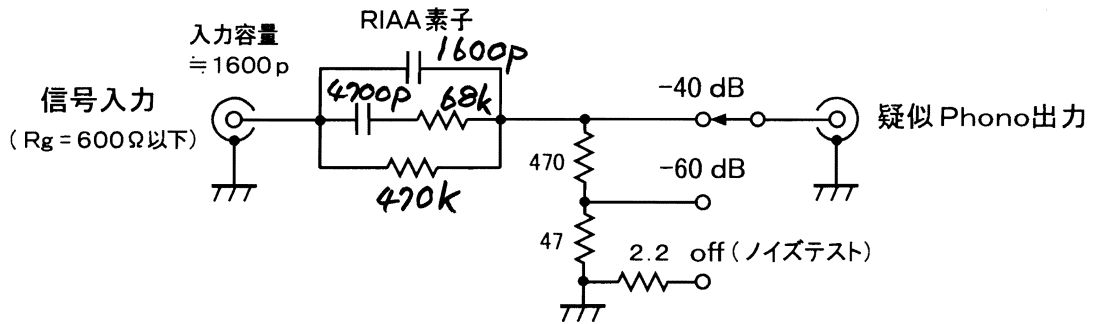
CDプレーヤー出力を本機に入れ、本機の出力をイコライザーアンプに通した音と原音と比較します。その時の音質の差が、イコライザーアンプの個性と判断できます。

本機の出力（減衰度）切換スイッチはイコライザーアンプの感度（MMかMC）に合わせてセットします。

片chでも聴感テストは出来ませんが一般的にはステレオの方が分かりやすいものです。

〔仕様〕

周波数範囲	20~20kHz
規格からの偏差	±0.4dB以下 (Rg=600Ω時) ±0.2dB以下 (Rg=100Ω時)
信号源抵抗	600Ω以下
負荷抵抗	100Ω以上
減衰(1kHz)	40dB/60dB /OFF(ショート)
基板寸法	90×110



2ch逆RIAA回路ボード
ブロックダイヤグラム
(同ユニット 2ch)